

自己概念と文化的人間観

竹村 幸祐

指導教官 結城 雅樹

人間というものをどのように捉えているのか、その捉え方は、文化によって異なるのかもしれない。本研究の目的は2つあり、ひとつは、人間全般についての集合表象である文化的人間観と、自分自身についての認知表象である自己概念が、概念的に異なるだけでなく実証的にも弁別可能であることを示すことである。もうひとつは、行動傾向の文化差と対応するのは自己概念ではなく、文化的人間観であることを示すことである。

文化的人間観とは、文化によって異なる人間主体の捉え方のことを言う (Markus & Kitayama, 1991; 北山, 1998)。Markus & Kitayama (1991) は、西洋に優勢な人間観を相互独立の人間観、東洋に優勢な人間観を相互協調的人間観と呼んだ。この文化的人間観を測定する質問紙尺度が数多く作成されたが (e.g. Singelis, 1994; 高田・大本・清家, 1996) Matsumoto (1999) によれば、これらの研究から得られた結果は一貫せず、「西洋では相互独立・東洋では相互協調」という Markus & Kitayama (1991) の主張を必ずしも支持していない。本研究はこの問題に対して、構成概念妥当性の問題を指摘する。これまでの尺度が測定していたのは、文化的人間観と言うより、自分自身についての観念である自己概念であった。しかし、自分自身と人間全般についての主観的な評価は、必ず一致するとは限らない。研究1では、相互に対応する自己概念尺度と人間観尺度を作成し、日本人87名を対象に調査を実施した。結果、自己概念尺度における相互独立の評価は人間観尺度よりも高く、有意差があった。

研究2では、日本人115名とオーストラリア人11名を対象に同様の調査を実施し、自己概念と文化的人間観の弁別性を再確認した。更に、自己概念尺度ではなく人間観尺度を用いれば Markus & Kitayama (1991) の主張した文化差が得られ、その文化差は行動傾向の文化差と対応することを示すために、シナリオ形式の行動尺度も併せて実施した。結果、日本では相互協調・独立の双方で自己概念と文化的人間観の間に有意差があり、オーストラリアでも、相互独立についての評価で自己概念尺度の得点が有意に高かった。日豪比較では、日本人の相互協調的行動を取る傾向はオーストラリア人よりも有意に高く、人間観尺度でもこれに対応する日豪差が見られ、日本人の文化的人間観は、オーストラリア人よりも有意に相互協調的だった。一方で、自己概念尺度では日豪差はなかった。以上の結果は、自己概念と文化的人間観は区別して扱うべきであり、人間観尺度を用いれば、Markus & Kitayama (1991) の主張した文化差が得られるという、本研究の主張を支持している。